

2004 大阪大学 
構 築 会
たより・会員名簿

大阪大学
構築会たより・会員名簿

— 2004 —

2004. 10. 1現在

大阪大学大学院工学研究科

土木工学専攻内

建築工学専攻内

〒565-0871 吹田市山田丘2-1

TEL (06) 6877-5111

FAX (06) 6879-7629

学大邛大

辦各員会・のよ式会業業

— 4004 —

2004. 10. 1現在

様宛冊学工邛学大学大邛大

内文事学工木土

内文事学工業業

〒565-0871 吹田市山田丘3-1

TEL (06) 6873-2111

FAX (06) 6873-7629

会 長 挨拶

構築会会長 小 嶋 清 伍 (C70)



構築会会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度総会で会長に就任させて頂きました。この1年間、皆様方との話し合いを大切に、構築会の発展のため出来る限り努力したいと思います。どうかよろしく願います。

私は現在大阪府土地開発公社で関空2期の用地造成への土砂供給や第二京阪道や阪神高速大和川線などの用地買収を通じ、大阪のインフラ整備の基礎を担っております。

又一昨年までは大阪府の河川一筋で、とくに2003年3月、世界183の国、地域からの参加を得て開かれた第3回世界水フォーラムに主催者またスピーカーとして参加し世界の水問題を肌で感じ、世界の水に関する関心は私が携わった治水よりも水量、水質が大きなウェイトを占めていることを実感したところであります。

さて今年の構築会だよりのテーマですが最近特に官民あげてよく聞く話題として「選択と集中の時代、その対応は？」とさせて頂きました。日頃役所にいる私が考えているところを述べさせて頂き、就任のご挨拶とさせていただきます。

今我が国はバブルの崩壊以降失われた10年といわれた長期の景気低迷の時代から脱し、世界にも認識される成長路線に入ったところであります。この間官民間問わず叫ばれたのが「選択と集中」との言葉でした。

企業においては限りある資源(ひと、もの、かね)を有効に活用し、勝ち組みになるため、意識改革をすすめ、コスト縮減、リストラを苛烈に行なった結果、自動車、デジタル製品をはじめとする多くの分野で再び世界を席巻しつつあり期待と明るさが見えてきたところであります。そして構築会会員の所属する土木、建築の分野においても多くの企業が俎上に乗りましたが、それも一息ついたところで、これから次へのステップを模索しておられるように見受けられます。

これからの社会基盤整備は迫り来る少子高齢化社会を現実のものとして受け止め、過去の全国一律から「安全で、安心できる、美しい国土造り」を目標に、持てる資源を集中し出来るだけ短期間で見える形にするスピードが必要であります。

今我が国の社会基盤整備は2つの大きな目標に向かって選択と集中を行い、同時に進めいづれもが特に急がれるものであります。

1つ目は安全で安心な災害に強い国土造りであります。

今年の新潟、福井における洪水被害や数年前の東海豪雨、毎年のように起こる過去最大豪雨(確率で言えば数百年に1回の雨)は過去我々が営々とやってきた治水対策を根本から考えることを迫っているように思えます。このような世界中で起きている異常気象が常態化したらと考えると、いつ何時襲い掛かる豪雨、それに対応するハードとソフト。

更にまもなく起こるであろう東海、東南海地震、これらに対応する社会基盤造りは単に行政だけでなく、土木、建築の業界、大学も含め考える必要があると考えます。

2つ目には美しい国土づくりです。21Cの最大の産業は「観光」で世界を通じ大移動が始まるといわれております。

過去、高度成長期、河川の上に高速道路を建設し、その利便性、経済性だけを追及した時代は終わり、これからは生活の質を高める魅力ある地域の再生を目指し我が国の街を用と美の調和のとれた日本の古来からの精神文化を感じさせる街として、訪れてみたい街に再生させ、多くの外国人が訪れる快適な街づくりが必要になってまいります。

この2つの課題を持つ大阪にある大阪大学、土木、建築が一体となった構築会として[産、官、学]が連携し発信できればと思っております。

最後になりましたが、構築会会員の皆様のご多幸とご健勝をお祈りしてご挨拶とさせていただきます。

目 次



会長挨拶

小 嶋 清 伍(C70)

構築会たより

構築会会則	6
構築会役員一覧	8
支部役員一覧	9
構築会会員数現況	10
訃報	11
専攻だより	12

土木工学専攻：新 田 保 次

建築工学専攻：甲 津 功 夫

伊藤富雄先生を偲んで	14
------------------	----

竹 山 喬(C52) 松 井 保(C63)

名誉教授の先生からのおたより	16
----------------------	----

榎 木 亨 村 岡 浩 爾

森 康 男 松 井 保

脇 山 廣 三 舟 橋 國 男

特集「選択と集中の時代、その対応は？」	22
---------------------------	----

田 端 竹千穂(C70) 井 上 章(C73)

古 川 博 一(C77) 谷 口 和 男(A80)

田 中 利 光(C85) 高 田 昌 行(C84)

卒業生だより	28
--------------	----

50 周年： 国 分 脩 治(A54)

40 周年： 葛 野 恒 夫(C64) 森 田 晴 美(A64)

30 周年： 青 木 利 博(C74) 巽 昭 夫(A74)

20 周年： 山 口 嘉 一(C84) 板 田 昌 彦(A84)

10 周年： 神 田 忠 士(C94)

支部だより	37
-------------	----

大阪支部： 芦 原 栄 治(C76)

愛知支部： 降 籬 達 生(C83)

東京支部： 大 田 哲 也(C83)

兵庫支部： 本 井 敏 雄(C75)

広島支部： 増 田 伊 知 郎(C80)

2004 年度役員会報告	42
--------------------	----

事務局だより	46
--------------	----

会員名簿

五十音別会員索引47

特別会員名簿61

正会員名簿67

 教室関係会員名簿69

 年次別卒業生・大学院修了生会員名簿71

在学生会員名簿193

卒業生勤務先別索引199

教室だより

 教職員構成223

 職員名簿225

 講義科目226

業界案内広 1

凡 例

1. 略号表

符 号	説明
C	建築工学科土木コース、土木工学科、地球総合工学科土木工学科目、建築工学専攻土木コース、土木工学専攻
A	建築工学科建築コース、建築工学科、地球総合工学科建築工学科目、建築工学専攻建築コース、建築工学専攻
U	学部
M	大学院前期課程(修士課程)
D	大学院後期課程(博士課程)
53*	新制1953年
氏名に付した()	()内は旧姓または旧名

2. 名簿には自宅住所のみ記載する。勤務先住所は勤務先別索引に記載する。

3. 住所には原則として、都道府県名を表示しない。

構 築 会 会 則

新設委員会

平成15年5月20日 改正

総 則

第1条 この会は構築会という。

第2条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。

第3条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻あるいは建築工学専攻のいずれかに置く。

第4条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

第5条 この会の会員は大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科の土木工学科目ならびに建築工学科目、大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻の現旧教官、卒業生、学生および役員会の議決によって入会を認められた者とする。

第6条 この会の会員に次の3つの種別を設ける。

(1) 正会員：卒業生、教官。

(2) 特別会員：名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決によって入会を認められた者。

(3) 学生会員：学部学生および上1号に該当しない大学院生。

役 員

第7条 この会に会長1名、副会長1名、幹事長1名、監事2名、委員若干名、幹事若干名の役員を置く。

会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。

幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。

委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。

第8条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。

幹事長は土木工学専攻および建築工学専攻の教授、助教授、講師のうちから互選する。

委員は各卒業年次から2名ずつ、各支部から1名ずつ互選する。

監事は委員のうちから互選する。幹事は土木工学専攻および建築工学専攻の教官から選出する。

第9条 役員任期は1年とする。たゞし再任を妨げない。

第一員分會章程

役員会・総会

- 第10条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年1回これを開く。但し、会長が必要と認めたときは随時これを召集することができる。
- 第11条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

- 第12条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。
- 第13条 会費は1ケ年、正会員3,000円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。
また、卒業45周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業46年目以降の会費を免除する。
- 第14条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

- 第15条 幹事団は次の各号の事業を行う。
(1) 会員名簿の刊行と配布。
(2) 講演会、見学会などの開催。
(3) その他の行事。
- 第16条 会員が叙位、叙勲などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。
- 第17条 会員が弔事の際は、次の各号による。
(1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、柩または盛花一对を呈する。
(2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、柩または盛花一对を呈することができる。
(3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会 則 の 変 更

- 第18条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。
- 付 則 この会則は平成15年5月20日より実施する。

構 築 会 役 員 一 覧

会 長 小 嵐 清 伍 (C70)
 副 会 長 坂 上 雅 勝 (A69)
 監 事 武 藤 和 好 (C87) 鶴 丸 達 也 (A87)
 幹 事 長 飯 田 克 弘 (C教)
 幹 事 荒 木 進 歩 (C95) 飯 田 匡 (A92)

学年委員

【 土 木 】				【 建 築 】				【 土 木 】				【 建 築 】					
1950								1977	蓮 輪 賢 治					古 宮 嘉 之			
1951	木 田 五 一 郎			伊 藤 俊 夫				1978	後 野 正 雄					吉 村 英 祐			
1952	竹 山 喬			木 村 康 彦				1979	正 田 正 一					有 坂 伸 二			
1953	高 野 浩 三			大 久 保 昌 一				1980	辰 谷 義 明					多 田 元 英 晴			
1953	濱 宏			片 倉 健 雄				1981	戸 上 拓 也					菅 原 正 晴 夫 人			
1954	松 山 巖			杉 原 正 昭				1982	磯 寄 正 哉					山 中 俊 夫 人			
1955	堤 道 夫			荒 木 兵 一 郎				1983	山 辺 建 二					丁 野 成 人			
1956	波 田 凱 夫			山 田 俊 満				1984	藤 田 眞 宏					板 田 昌 彦 三 治 之 裕 一 潔 史 晃 豊 聡 樹 士 隆 治 司 久 基 太			
1957	広 内 徹			秦 洋 一 郎				1985	玉 井 昌 宏					杉 本 正 健 智 之 辰 通 光 洋 一 潔 史 晃 豊 聡 樹 士 隆 治 司 久 基 太			
1958	木 村 悌 士			脇 山 広 三 宏				1986	山 内 一 浩 好 之 博 朗 之 潔 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					桐 野 田 名 辰 之 裕 一 潔 史 晃 豊 聡 樹 士 隆 治 司 久 基 太			
1959	上 根 善 敦			金 田 象 一 夫				1987	武 藤 和 好 之 博 朗 之 潔 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					芦 川 合 塚 井 井 松 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1960	小 野 昇 男			藤 井 象 一 夫				1988	鍋 島 康 之 博 朗 之 潔 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					椎 名 辰 通 光 洋 一 潔 史 晃 豊 聡 樹 士 隆 治 司 久 基 太			
1961	村 上 昇 男			眞 塚 達 夫				1989	小 野 正 益 茂 之 潔 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					川 中 向 岩 若 澤 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1962	榎 木 帳 男			入 江 恂 一 新 太 郎				1990	星 加 益 茂 之 潔 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					中 塚 井 井 松 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1963	松 井 保 圭 一 郎			中 江 新 太 郎				1991	村 上 益 茂 之 潔 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					向 岩 若 澤 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1964	濱 田 圭 一 郎			森 田 晴 美 孜 嗣 夫 祥 夫 喜 八 郎 俊 雄 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1992	小 野 弘 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					岩 若 澤 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1965	島 田 壯 八 郎			小 島 久 嗣 夫 祥 夫 喜 八 郎 俊 雄 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1993	大 西 弘 志 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					若 澤 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1966	宇 野 剛 正 治			市 嶋 久 嗣 夫 祥 夫 喜 八 郎 俊 雄 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1994	神 田 忠 士 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					澤 井 西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1967	梶 川 靖 治 也			竹 嶋 祥 夫 喜 八 郎 俊 雄 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1995	荒 木 進 歩 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					西 田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1968	谷 口 剛 也 彦 晴 司 正 二 登 博 敏 信			香 西 喜 八 郎 俊 雄 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1996	松 本 忠 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					田 中 木 秀 武 隆 治 司 久 基 太			
1969	武 内 一 彦 晴 司 正 二 登 博 敏 信			大 津 俊 雄 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1997	山 内 淳 平 充 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					八 橋 本 前 田 正 久 訓 正 景			
1970	阿 部 信 晴 司 正 二 登 博 敏 信			木 林 長 仁 彰 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1998	木 村 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					寺 多 田 丸 本 本 田			
1971	伊 東 伸 司 正 二 登 博 敏 信			角 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				1999	下 村 公 一 郎 美 保 則 樹 志 素					寺 多 田 丸 本 本 田			
1972	木 村 正 二 登 博 敏 信			森 田 孝 夫 修 治 昭 夫 泉 彦				2000	内 田 美 保 則 樹 志 素					多 田 丸 本 本 田			
1973	森 永 勝 登 博 敏 信			木 村 修 治 昭 夫 泉 彦				2001	橋 本 直 武 志 素					軸 山 本 本 田			
1974	青 木 利 博 敏 信			巽 倉 泉 彦				2002	竹 口 直 武 志 素					山 本 本 田			
1975	前 田 敏 信			家 倉 泉 彦				2003	蒲 原 武 志 素					藤 柴 田			
1976	長 谷 川 善 信			鈴 木 克 彦				2004	青 木 康 素					柴 田			

支 部 役 員 一 覧

(主 席 日 員 01 年 1002)

支 部 員 会 会 員 名 簿

博 合	愛 知 支 部	支 部 長	英 比 勝 正 (C72)	副 支 部 長	矢 野 修 一 (C74)	幹 事 長	降 旗 達 生 (C83)
101	大 阪 支 部	支 部 長	春 元 靖 弘 (C69)	副 支 部 長	田 中 久 俊 (C72)	副 支 部 長	福 来 知 自 (A72)
8		幹 事 長	芦 原 栄 治 (C76)				
118	東 京 支 部	支 部 長	金 子 俊 六 (C68)	副 支 部 長	中 村 康 一 (A73)	幹 事 長	大 田 哲 也 (C83)
14	兵 庫 支 部	支 部 長	西 田 泰 晤 (A68)	副 支 部 長	佐 俣 千 載 (C71)	幹 事 長	田 谷 孝 壽 (AM83)
0	広 島 支 部	支 部 長	中 山 隆 弘 (C68)	副 支 部 長	芥 川 省 三 (C74)	幹 事 長	増 田 伊 知 郎 (C80)
302							
430							

支 部 員 会 会 員 名 簿 (主)

構築会会員数現況

(2004年10月1日現在)

会員種別	内 訳	土木	建築	合計
正 会 員	学 部 卒 業 生	1,796	1,852	3,648
	修 士 課 程 修 了 生	119	98	217
	博 士 課 程 修 了 生	55	46	101
	現 自 任 教 官	3	5	8
	小 計	1,973	2,001	3,974
特 別 会 員		56	62	118
学 生 会 員	後 期 課 程	10	14	24
	前 期 課 程	9	10	19
	学 部 4 年	47	47	94
	学 部 3 年	41	45	86
	学 部 2 年	40	42	82
	学 部 1 年	0	0	0
	小 計	147	158	305
合 計		2,176	2,221	4,397

注) 会員数は物故者を除く

訃報

2003年10月～2004年9月に、下記の方々が逝去されました。

謹んでお知らせいたします。

伊藤 富雄 (C特)

小野 正順 (C特)

木地 晴彦 (A51)

後藤 啓成 (A52)

神出津 嶺雄 (A55)

辻 本 実 (A57)

星 忠 甫 (A63)

芦 辺 隆 彦 (A66)

西 井 美 彦 (A68)

大 木 博 文 (C72)

勘 坂 幸 弘 (A83)

梶 本 賀 子 (A96)

建築工学専攻の近況

(22) 新山

専攻長 甲 津 功 夫

既にご承知の通り、本年4月1日から新しく国立大学法人大阪大学が発足致しました。この度の改革により、組織運営は元より教育、研究の現場に至るまで大学全体が大きく変貌することになると思われます。この新しい歩みと建築工学専攻の取り組みにつきましては後ほどご紹介させて頂くこととし、まず専攻のこの1年間の近況をご報告申し上げます。

はじめに専攻内の人事をご報告いたします。2003年11月に建築・都市形態工学領域の阿部浩和講師が助教授に昇任されました。益々のご活躍を願っております。2004年3月には建築・都市計画論領域の舟橋國男教授、建築・都市形態工学領域の吉田勝行教授が定年退官されました。舟橋、吉田両先生が本学並びに専攻、建築学の発展に果たされました輝かしいご業績につきましては改めて申し上げるまでもなく、先導されました道を更に拡大、発展させることが後進の私どもにとりましての責務であると考えます。

専攻の学生数は、学部生を含めて総数269名、その内28名が外国人留学生です。企業に所属しながら入学している、いわゆる社会人博士後期課程の学生は8名、研究生が5名在籍しています。外国人留学生の出身国は、中国(9)、韓国(15)、ラオス(2)、チュニジア(1)、ウルグアイ(1)です。学生の進路ですが、今年度は他大学、本学の他専攻の志望者も含め42名が大学院博士前期課程への受験を希望しています。後期課程への希望者は3名です。就職状況は相変わらず厳しい状況にあります。しかし、卒業生諸氏のご尽力のおかげで順調に内定を頂いておりますが、7月現在で数名の民間企業希望者と公務員希望者が未内定となっております。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、最初にご紹介申し上げました国立大学法人化後の大学の現況ですが、工学研究科は従来の24の小専攻を再編して平成17年度から10の大専攻体制に移行しようとしています。船舶海洋工学、土木工学(平成17年度から社会基盤工学に名称替え)、建築工学専攻と、(現)地球総合工学専攻の内の前記3専攻の関連領域は、(新)地球総合工学専攻に再編される予定で、本年度から前倒して組織運営、教員人事などがこの大専攻レベルで運用されつつあります。研究科全体の再編に伴い、新たに代議員制度が設けられ、(新)地球総合工学専攻の初代代議員として橘 教授が選出されました。代議員は大専攻の運営、教育・研究体制に係る中期目標・計画を定めて実行するとともに、達成度の評価を行うという重要な責務を負っています。(現)建築工学専攻も(新)地球総合工学専攻を構成する基幹部門の一つとして、大専攻の中期目標・計画に沿って発展することが求められています。また、法人化後は今まで以上に「社会に開かれた大学」としての学内情報の公開や産、官、社会との連携推進が求められています。この一環として、5月から7月末までの毎週月曜日に若手技術者を対象に「建築構造ブラッシュアップ講座」を中之島センターで開催致しました。お陰様で多数の参加を得て、わずかながらも社会貢献をさせて頂きました。

構築会員の皆様におかれましては、今後とも大学の動向に関心をお持ち頂き、お力添え賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

伊藤富雄先生を偲んで

松井 保 (C63)

本学名誉教授 伊藤富雄先生は、平成15年11月25日虚血性心疾患のためご逝去されました。享年83歳でした。

伊藤先生におかれましては、お亡くなりになる数ヶ月前の足の骨折を乗り越えられ、リハビリも順調で、2ヶ月ほど前からは、理事長を務めておられました日本地下水理化学研究所の会合や教え子との夜の席にも、お元気に顔を出されておられました。また、大好きな自動車の運転も再開しておられました矢先のこと、先生には誠に無念であったと存じます。私共も突然の訃報に接し、非常な驚きとともに、誠に痛惜にたえません。茲に、謹んで哀悼の意を表します。

先生のご業績やご功績につきましては、いまさら事新しく私が述べるまでもないと思いますが、先生は、30有余年、大阪大学においてトンネル工学・地盤工学の第一人者としてご活躍になり、昭和40年代の大学紛争時には、工学部長として大いにその手腕を発揮されますとともに、大学運営の枢機に参画されました。また、港大橋の超大型ケーソンなど多数の著名なプロジェクトに係られるとともに、天六ガス爆発事故や大阪駅前ビル出水陥没事故の際には、その原因究明に多大の貢献をされました。大阪大学ご退官後は、大阪工業大学学長、学術会議会員としての第5部長を務められますとともに、勲2等旭日重光章、土木学会功績賞、地盤工学会功労章などを授与されました。

また、先生は、構築工学科には創設期よりかかわられ、土木工学科の生みの親・育ての親と申し上げても過言ではありません。その一端は、先生が「構築会だより」に毎年書かれていました「大学というもの」、「構築22年の思い出」および「土木工学科の創設と発展(その1)」に表われていると思います。これらの連載を楽しみにされていた方々も多かったかと思いますが、今後は叶わぬこととなってしまいました。

私共、先生の教え子は、先生の授業中をはじめとして、いろいろな場での函に衣を着せない伊藤節にしばしば感銘を受け、そのユニークなご高説を人生の糧として過ごしてこられた方も数多くおられます。私事で恐縮ですが、私が大学に残りましたときには、伊藤先生にまずこう言われました。「わしと同じことをしても、偉うならんから違うことしいや」と。そのときには、その意味が十分のみ込めませんでした。後になって、これは先を十分に見越した言葉だと感心するとともに、大局観を持って物事に取り組む姿勢も大いに学ばせていただきました。

これからは、あの伊藤節も聴けなくなりますが、これまでのご薫陶や先生との思い出は、私共の心の中で立派に生き続けていくことと存じます。どうか安らかにお眠り下さい。



高齢者運転講習会を受講して

名誉教授 榎木 亨

紅葉マークをつける年齢は何歳ですか？

若い人にこのように尋ねても明確に70才からと答えられる人は少ないであろう。数年前までは75才であったようで、75才を越えた人に高齢者運転講習会の受講が義務付けられていた。ところが、平成14年からはこの高齢者年齢を70才まで引き下げて上記講習会の受講修了証がないと運転免許の再発行が許可されなくなってきている。私もこの6月が免許再発行のときに当たるので、高齢者講習会の受講通知がきた。各自動車教習所で開かれているので、自分の希望の教習所を希望すればよく、私もかつて(21年前)習った服部緑地自動車教習所に出向いて受講することにした。何のテストを受けるのかわからないので若干緊張気味に5月20日に出向いた。受講者の方々も同じような思いであろうか、所定の時間15分前には殆どの方が講習会の会場には顔を揃えておられた。年齢は70才以上であることは確かであるが、80才を越えておられるのではないかと見られる方も数名数えることができた。

講習は1時間目：学習 2時間目：運転適性検査 3時間目は実技にわかれている。学習では事故の起こり易い場所、並行車(特にバイク)への注意など、なるほどと納得させられる事を講師及びビデオによって説明される。自分の肉体の衰えを感じさせられたのは2時間目の運転適性検査で視力は眼鏡で1.2であったのが、動体視力になると極めて低下し、30～59才の平均より劣る評価がされた。また、シミュレーションによる運転適性検査は反射動作能力、反応の速さ、ハンドル操作、複数の作業を同時に行う能力に分かれて行われた。孫達がやっているようなテレビゲームのようなものだが、実際にやってみると予想以上に自分の反応が鈍いのに驚く。特に私は注意力とハンドル操作が悪く、複数の作業を行う能力は良いという結果が出て、総合的な結果は普通という判定を頂いた。自分自身を運転は決してうまい方ではなく、余裕のある時間をとるように心掛けてはいるのであるが、それが点数で表れてくるとますますこの結果を謙虚に受け止める必要があることを感じた。3時間目の実車テストは講習を受けた直後であり、一時停止、左右確認など無難にこなし、20年以前に学んだ実地テストコースを再確認しながら終えた。このテストはこの結果で合格、不合格を決めるのではなく、年齢相応の体力の衰えを自覚させるものであるという趣旨なので、面倒ではあるが、そういう面での講習会の価値はあるように思う。

なお、最初に述べた紅葉マークは強制されたものでなく、つけたい人はつけて下さいということであった。今後高齢者運転が増えてくるときに必要なことであり、私自身3年後の再度免許切り替えのときに再受講すれば今回の結果がどのように変わるか(このとき運転ができておればよいのだが?)は興味のあることである。

阪大土木教員の名誉教授で70才を超えて運転している人は伊藤教授が亡くなられた今、私一人であるが、事故を起こさぬように、その為にはやはりこの講習会で指摘された点を守って今後も永く運転を続けたいと思っている。

土 壌 汚 染 の 行 方

名誉教授 村 岡 浩 爾

もともと空気、水、土はただであった。ところが今はお金を出して使わせてもらう。これらを汚すやつがいるから、きれいにするのにお金が必要なのである。

我々を取りまく環境媒体である空気、水、土は、人間を含むあらゆる生物の基本資源であり、これがなければ生きていけない。この共有財産コモンズが、不特定多数の人や公的な組織の活動や行動によって侵されるとき、これを公害という。幹線道路の自動車排気ガスによる沿道の大気汚染は、最近では典型的な公害である。しかしながら大気や水の汚染はここ30年の間に排出規制等の規制行政によって一定の効果を上げ、大局的にはこの種の公害は沈静化してきたと言われている。

しかし土壌汚染は違っていた。空気をきれいにするには税金を、水をきれいにするには水道料金を支払うことによって、みんながみんなの健康を守ってきたのだが、土壌だけはその体制になく今でも健康を害する危険性が内在している。土壌汚染対策法が平成15年2月に施行されたが、何とこの法律は大気汚染防止法、水質汚濁防止法に遅れること30年の法制定である。なぜこんな事になったのか。

土は基本資源の中でも公益を産むことのできる特異なコモンズである。森林を育て稲作を可能とし、古来、生活の糧を得るために共有資源としての土を持続的に維持してきた。ところが、牧場の例なのだが、少しでも人より儲けてやろうと約束を破って隠れて多くの羊を放ち、はじめは目立たなかったもののみみんながそうし出したものだから、結局は資源が破滅してしまう「コモンズの悲劇」という論理が生じた。現代の都会がまさにそれである。土は土地という名目で値段が付く。より多くの土地を買い占め、知ってか知らずか少しずつ目に見えぬ土壌汚染、地下水汚染を生み出して行き、その者は莫大な富を得たものの結局は人の健康に影響を及ぼす公害として捨ててはおけぬものを残した。土は公有物でありながら同時に私有物の性格をもつところに法制度の適用の難しさがあったのである。

とは言え、全国の土壌汚染を放置するわけにはいかない。土壌汚染対策法は有害物質を扱う施設は廃止された時点で土地の調査が始まり、一定の汚染レベルを超えると人の健康への影響を回避する措置が命ぜられる。しかし法の適用を受けない土地でも多くの汚染地があり、これらも放置するわけにはいかない。なぜなら、もしその土地が売買の対象になると、土地の鑑定の中に汚染の有無の調査が必要になるからである。誰もが汚い土地を持ちたくないわけである。となると、法の対象にならなくても地下に汚染物を持っている土地は、早く対策を講じておいた方が得だということになる。ただ、いい加減な対策では困る。きちんと専門家が認める対策でないと、事態は後戻りすることがある。

昨年11月に亡くなられた伊藤富雄先生のあとを継いで、はからずも本年4月より(財)日本地下水理化学研究所の理事長を務めている。この財団の業務の一つである土壌・地下水保全対策について、最近、構築会の会員から色々相談を受けることが多くなった。この課題に直面し、適切に対応することがまさに土木・建築の事業において避けて通れぬ道になっている。幸い、この財団の所員として、松井保教授(福井工業大学)、佐藤邦明教授(埼玉大学)、端野道夫教授(徳島大学)、中辻啓二教授(阪大院)、阿部信晴助教授(阪大院)、平田健正教授(和歌山大学)、福原輝幸教授(福井大学)に活動していただいている。また専務理事は大先輩、前田泰敬氏であり、理事には榎木亨名誉教授と高野浩二氏、監事に松村明氏、評議員に松山巖氏、佐藤邦明教授、孝石欽一氏の構築会会員に在籍して頂いている。このような有能な面々と力を合わせ、健全な水循環と地下水環境の創出、土壌汚染のない安心できる土地づくり、こういった願いを込めて日ごろ活動している次第である。

夏 休 み に つ い て

名誉教授 森 康 男

今年例年になく暑い夏が続いています。立秋に近い今日でも最高気温35度にまで上り、蒸し暑さも今年一番のようです。

今年から、国立大学も独立法人化し、いろいろな制度が変わったようですが、福井工大でも前期の授業が8月の第1週まで続けられ、立秋近くになってやっと夏休みに入りました。以前大学では、夏休みは7月10日頃から9月10日頃までで、9月末まで1学期の授業を続け、10月の最初の2週間で期末試験をやって1学期を終了しました。そのうち、国立大学の学期と国の会計年度の区切りと合わないのは不合理だとかの理由(本当のことはよく知りませんが)で、夏休みを7月と9月でそれぞれ1週間ほど削って9月末までに1学期を終了するようにしました(そのために教室にもエアコンを設置することになったと記憶しています)。今度は、1学期間を途中で分断するより、通して行った方が効率的であるということでしょうか、日本では最も蒸し暑くて過ごしにくい7月いっぱい、さらに8月第1週まで授業をやることになりました。初めてのせい、今年の並はずれた暑さのせい、最後の方はバテ気味でした。

京都では、夏は祇園祭に始まり、五山の送り火に終わると言われています。祇園祭もハイライトの山鉦巡行は7月17日ですが、祭りそのものは7月1日に始まります。マレーシアのクワラルンプールにも住みましたが、最高気温は30度を超えることはまれで、大阪や京都の7月の方がよほど暑いという感じがします。

何を言いたいのかと言いますと、なんだか最も蒸し暑い教師も学生も頭の回転の最も悪くなる時に授業をやって、もう夏も終わりになる頃から夏休みをとるといふ、実際の気候と学年暦が合わない変なことになっているのではないかとということです。何でこんなことになるかということ、それは日本の会計年度が4月に始まり3月に終わりますが、それに引きずられて大学の学年暦も4月から始まるからです。韓国では学年暦は3月に始まると聞いています。また欧米では多くの国が、新学年が9月から始まり、6月上旬にはすべて終了し、6月の後半から9月上旬まで約3ヶ月が夏休になっています。

日本では、冬休みや春休みに分散されて、夏休みが短くなり、しかも最も暑いときに休めないという不合理が生じているのです。私学などでは2月上旬には殆どの授業が終了しますので、韓国のように3月から新学年を始めても不合理は生じないと思います。国立大学も独立行政法人化して少しは自由になったのでしょうから、3月から始めることを検討してはどうでしょうか。その方が国際的な学会などのスケジュールにも合致するし、省エネルギーにも寄与すると思います。入学試験についても、現在ではいろいろなメニューで実施されていますので、国立大学も私学も季候の悪い2月を避けて、1月に繰り上げるようにできると思います。

この原稿を締め切り間際になって、汗をかきながら書いています。なかなか進まないの、少し涼しい階下へ行きましたら、家内が「谷崎源氏」を読んでいて、「あの紫式部でも「いま少し問わず語りもしたいのですが、今日はひどく頭痛がして、面倒で、大儀ですから、いずれまたついでであります時に、……」と筆を止めているから、その辺でまたにしたら」と言ってくれました。まだ依頼された字数には不足していますが、この辺で失礼します。

構築会会員の皆さまのご健勝とご活躍を祈ります。

定年退官に際して

三 重 山 田 製 鋼 有 限 公 司

名誉教授 松 井 保

本年3月末で、40数年間お世話になりました大阪大学をめめでたく定年退官することができ、名誉教授の先生方のお仲間入りをさせていただきました。これもひとえに長年にわたる皆様方のご支援の賜と感謝申し上げます。4月1日からは、大阪大学も国立大学法人に移行いたしましたので、国家公務員として全うした最後の国立大学教授ということになりますし、今後は「退官」という言葉も使わなくなるようです。

私の退官に際しては、2月には最終講義、6月には退官記念祝賀会を盛大に開催していただき、ともに私の想像を超える多くの方々においていただきました。後者におきましては、宮原秀夫総長、豊田政男工学研究科長、W.VanImpe国際地盤工学会長をはじめ、名誉教授の先生方、大学運営、学協会や種々の技術委員会などでお付き合いいただいた方々、卒業生・門下生の方々など多数ご臨席いただき、大いに感激いたしました。西村宣男実行委員長以下各委員にお世話いただいています退官記念事業は、記念出版などあと少し残っておりますが、ここまで来れたのも皆様方のご支援があったからこそと、心からお礼申し上げます。誠に有難うございました。

4月からは、福井工業大学に勤務しています。阪大の建設系からは、森康男先生、鈴木計夫先生、浜本剛実先生がすでに行かれており、阪大全体としては、学長の三宅正宣先生をはじめ約20名の先生方がおられますので、初めての大学にいるような感じがいたしません。また、福井在住の卒業生の方々には、歓迎会もしていただき、ひと時を楽しく過ごしました。

福井へは、週に2泊3日か1泊2日で行き、大学所有の温泉(正真正銘です)付きホテルに宿泊しますので、毎週出張という感じです。通常、福井へは片道約3時間のドライブで行っています。というと、それは大変だと思われる方が多いと思いますが、1週間の通勤時間を考えますと、ホテルは大学に隣接していますので、大学への通勤時間は6時間+数分、大阪では淀屋橋のオフィスに行くとして、往復1時間/日×2日で2時間、トータル約8時間となり、実はこれまでとあまり違いがありません。また、小生にとりましては、ドライブ中は週6時間のリラックスタイム+クラシックアワーとなっており、これまでになかった快適な時間が確保できています。

以上のように申しますと、如何にもよい事づくめようですが、福井滞在中の2日間は講義、少人数教育、卒研指導などびっしり詰まっております、これまでこれほど教育に時間を割いたことがないと感じるほどです。ある先輩の先生からのアドバイスである「悟りを開いていっちゃい」を肝に銘じているこの頃です。とはいえ、7月の福井豪雨の際には、3日後に現地視察に行きましたし、地盤工学会の災害調査団のメンバーにもなっていますので、福井地域のお役に立つ技術的活動も徐々に増えてくると思っています。

実行委員長を務めました、6月初めの国際シンポジウムIS-OSAKA2004も多くの方々のご支援を頂き、大成功に終えることができました。また、来年9月には、副実行委員長を務めています第16回国際地盤工学会議が大阪国際会議場で開催されます。さらには、多くの技術委員会などの活動も急には減らない状況ですので、今までよりも時間に追われている感じで、当分休まる暇はなさそうです。

最後に、私の退官に際して頂きました教室の皆様方のご厚意に心よりお礼申し上げます。

バーカモー先生との再会

名誉教授 脇山 廣三

大阪大学の定年を残して、大阪産業大学に就職して八年、四月からは客員教授となりました。しかし、教授会に出席の義務がなくなった他は勤務実態に変わり有りません。あと一年ほど勤めるつもりであります。

この七月の初旬に橘教授が企画した大阪大学のコンベンションセンターを会場としたSE04のシンポジウムの鋼構造の部門のチェアマンとして、トロント大学のPeter Birkemoe教授を呼んでいただき、久しぶりにお会いすることが出来ました。この企画は素晴らしいもので、当初の予定よりも多くの海外の研究者が参加されたのに驚きました。また、いろいろなアトラクティブな企画もされ、橘教授とそれを陰で支えた方に敬意を表したいと思います。

このシンポジウムの後、Peter夫妻と私たち夫婦で信州にドライブいたしました。茨木のインターから松本インターまでは四時間程度で思ったよりは楽に到着でき、松本城、信州そば、ガラス工芸美術館、八ヶ岳周辺の自然に触れて、二泊三日の旅でした。

私は1966年9月からほぼ一年間、イリノイ大学にMunse教授の招きでボルト接合研究のResearch Associateとして行きましたが、Peterはこのときの共同研究者で、研究・日常生活のサポートをしてくれました。

Peterはその後、トロント大学の教授となり、1978年の夏から半年の間、サバティカル休暇を利用して、家族五人で来日されましたが、まだ、大阪大学では受け入れる体制が整っておらず、宿泊所については、私どもで探さざるを得ませんでした。このときには新日本製鉄の箕面の社宅を貸していただけて助かりました。しかし、冷暖房施設・冷蔵庫・洗濯機等を我々が設置し、日常使う食器の準備など、かなり受け入れが大変でした。我々がイリノイ大学に行ったときに保証金不要、設備付きのアパートを借りたときの簡単さを思うと、当時の我が国のシステムのまずさを強く感じました。この年には北海道で建築学会があり、Peterさんの家族と五十嵐研究室のスタッフ・院生・学生が日本海フェリーで北海道に渡り、ドライブをして行く先々で楽しい出来事に出くわしたことを思い出します。

Peterは1996年の秋にも、橘教授が企画したIA96のリバモア研究所開発のソフトDYNA3Dを中心としたシンポジウムにも参加され、比較的短期間、日本に滞在されました。

今回、Peterさんの来日にあたり、26年前に北海道旅行を共にした五十嵐研究室のボルト研究グループは、急な呼びかけにもかかわらず千里中央の楓の木というお好み焼きの店に寄ることが出来、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

私のパソコンは、Macintosh G4をメインとして使っていますが、大学関係の書類作り、海外のシンポジウムの論文などはWindowsのファイルが要求されることが多いので、Windowsのマシンも使っています。私の作業テーブルは以前に手作りしたもので、最近、天板の傷みが激しくなったので、天板を交換し、2台の液晶ディスプレイの上の空間を本棚にするように改作いたしました。私のシステムは、以上のマシンに加えてデジカメ・スキャナー・カラーレーザープリンター・写真用の顔料系カラープリンターで、外部との接続はオプティカルなBフレッツです。

わが家に来た人は以上の状況を見て、環境は非常に良く整っていますね。ここから先、何か言いたそうですが、私は聞こえないふりをしています。

どうでも良い近況

(052) 藤千代 誠 田

名誉教授 舟橋 國 男

この4月初めの退職挨拶にこれからは晴耕雨読の真似事をして暮らしたいと書いたが、なかなか難しい。何とか学会だ何やら委員会だ頼まれたのだとの口実で出歩いている。綺麗さっぱり整理し尽くせなかった自らの責任であるが、実は内心浮き世への多少の未練もあるから我ながら浅ましい。家人はじめ親しい人たちからは未だ足抜け出来ないのかと、ついこの前までの私の仕事とその筋の掟に縛られでもしている類かのように疑われている。

5月には都市住宅学会と人間環境学会の役職をそれぞれ辞任し、これ幸いと6月初めに米国はAlbuquerque(アルバカーキと言うそうです)でのEDRAなる学会に行き、Laguna ReservationやAcoma Puebloを訪れ、あの有名なSky Cityへも登ってきた。7月にはウーンでのIAPSなる学会に出かけ、ついでにアムステルダムとブダペストに立ち寄った。それやこれやで今のところ何しろ煩い手続きが要らない分、在職時よりは出歩き度・飛び跳ね度は大きい。外国の町に行くとやはり国内よりは印象的なことが多く(勝手にそう思うだけであるが)、なにがしか緊張もするし楽しくもある。

運転免許不保持運動世界連盟会長(嘘です)の私はアメリカではグレイハウンドかアムトラックを愛用するのだが、学会をサボってアルバカーキからSanta Feへ行くとき、朝6時にバスデポで切符購入、魔法遣い婆さんの爪したお姉ちゃんガム噛みながら「Photo付IDは?」と当然とばかりジロリ、これが悪運の始まり、9番乗り場の筈がそこにはDenver行きが駐車、列為す人にアルバカーキへ行くかと尋ねるとNo!とのこと。ウロウロしていると魔法使いが遠くから「それだよ!」と曰うので、発車間際に飛び乗って事なきを得たが、要は下手な英語は怪我のもと、今までもコトバの失敗は数え切れないが、「このバスはアルバカーキに留まるか」と正確に尋ねるべきところを「この列はアルバカーキ行きか」と言ったらしい。さてサンタフェに着いて驚いたことにこのデポ、行ってみたい中心部からは遙か遠く離れている。グレイハウンドやアムトラックを愛用するとは申せ、こんな時は無性に腹立たしく、日本の一極集中猥雑ターミナルが懐かしい。電話でタクシー呼べばとデポの親父は涼しい顔、電話探して番号調べてタクシー呼ぶのに一苦労。まあそれでも何とかなるもので、ダウンタウンやIndian Art Museum, Museum of Fine Art, Georgia O'Keefe Museum等を見て回った。チップはあるが流しのタクシーの無い社会では、当たり前だが小銭を切らさず電話を探しての繰り返しで漸く帰りのバスに。

ブダペストでは、この3月に阪大で学位を得たNagy Gaborさんのご案内で誠に充実した数日を楽しんだ。彼の出身Budapest University of Technology and Economics(1782年=天明2年設立!)の本部にお邪魔し、学長・建築歴史学の先生・国際交流部長にお会いできた。本部建物が世界遺産だと伺ってはいたが、やっぱり凄いなとしか言いようがない。私は建築決定論者ではないが、否、反対しているのだが、やはりこのような歴史と伝統に裏打ちされた建築物で(しかし猶莫大な投資を得つつ巧みで着実な現代化は進められている)行われる研究教育と、この頃の新しい建物でのそれとでは勝負にならないのではないかと感じてしまう。因みに、Gaborさんの話では、この建築学部をストレート6年間で卒業できる率は約10%とのこと、事の良し悪しは即断できないが昨今のJABEE騒ぎが空々しい。

粗野としか言いようのないアメリカと、古くさいのか歴史の重みか垣間見たオーストリアだハンガリーだハプスブルクだEUだ大ヨーロッパだ云々と、これから日本はどうするのか、人並みに考え込んでいる(嘘!)この頃です。

選択と集中って、そうなんだけど……。

(80) 光 岡 中 田

谷 口 和 男 (A80)

勝ち組企業では当然の「選択と集中」とはいかに進められているのだろうか。公共部門でも、限られた資源、予算を効果的に、集中投資することが強く求められており、行財政改革や構造改革への取り組みも、さらに加速されつつある。今後、大阪や関西圏において、高度な技術を駆使した、洗練された美しい巨大な都市建設に向けて「選択と集中」が強化され、また、人々の生活空間においても、さらなる高質化・量的拡充が進められていく。そのため多くの力を結集しなくてはならない。

しかし、一方、それぞれの現場では当然いろんなあつれきを伴うわけで、具体的に何を選択するか、しないかについて、そんなにスムーズに進んでいるわけではあるまい。

課題を克服し、現状を打開するために、これまで、たくさんの概念が生まれ、駆使されてきた。高度情報化、超高齢化、情報公開、説明責任、政策評価、決算主義、消費者保護、住民参加、多極分散型、国際化、地域主義、土地信託、定期借地権、都市再生、特区、民間活力、コスト縮減、アセスメント、リストラクチャリング、ベンチャー、マニフェスト、グローバリゼーション、リンケージ、パブリックコメント、ユビキタス、ネットワーク、ユニバーサルデザイン、ノーマライゼーション、NPO、NGO、TMO、ISO、PFI、TDR……。はやりすたれということでもないが、我々の仕事、これらの言葉に翻弄されてきたことも否定できない。あんまりたくさんあるので、こっちの方も「選択と集中」してもらいたいものだが、そうもいかない。この言葉は大多数の合意を必要とする民主主義とはやや矛盾する概念なのかもしれない。

社会全体から見たら、土木・建築系の産業は、おおざっぱに言って、選択されない方の領域になるのだろう。今、我々建設関連の仕事に従事する者の大半が、選択・集中投資される事業に携わっているとは限らない。むしろ、選択されなかった領域で、できるだけ被害を少なくするために、退却戦を戦っている人も少なくないのではないだろうか。そんな立場にも、もっとちゃんとした評価がなされるべきなんだが。でも、こうなったのは、これまで既に、ずいぶんと造ってきた結果だともいえる。

この百数十年くらいをみても、自然災害や人為的災禍が幾度も襲ってきた。この間、都市圏規模で鉄道や高速道路が拡張され、構造物の立体化や各種のインフラ整備、住宅や建築の高層化、都市空間の拡大、輸送・移動の高速化、機能の高度化が進み、それによって、まちの安全性、防災性、衛生、機能性、便利さ、快適性、美しさも格段に向上している。建築物の免震、制震技術も広く普及しつつあり、設備面の高度化や省エネルギー化も目を見張るものがある。

以前、某有名建築家が、これまでのまちづくりは、経済至上主義で進められてきたと発言していたが、そんな単純なものでもない。建築屋、土木屋、技術屋、まちづくり屋として、そのつど、現場にあって、最大限の努力をしてきた。これまで、都市建設に携わってきた先人たちの苦勞と功績は大いなる誇りであり、また、それを引き継いで、今日までやってきた、我々の努力も含め、偉大な仕事であったに違いない。今も課題は山積してはいるが、今のような恵まれた時代・社会をつくるのが目標であった。目的は達成されつつある。技術が勝利する。

まあでも、こんな総論をいくら言っても、さしておもしろくもない。中央で全部決定して、あとはそれにみんなが従うシステムなんてとっくに失敗している。今ようやくわかったことは、具体的な“現場”こそが大事で、おもしろく、そこを離れては必ず失敗するということなんだから。

「選択と集中」のための意識形成

～技術屋の感性について～

田中利光 (C85)

「選択と集中」と叫ばれて久しい。「21世紀は選択と集中の時代だ」とも言われている。国もかつては国土の均衡ある発展を進めていたが、地域の個性ある発展に変わり、現在は、都市間競争に勝ち残るべく都市再生を推進しているのも、まちづくりの「選択と集中」だと考えられる。

「選択と集中」は、組織がコストパフォーマンスの良い業務を優先し、そこに人や金などの資本を集中して、利益など組織の目的(行政の場合はサービス)を最大化しようとするところから、20世紀にも組織が当然、実施してきたことであり、これからも進めるべきことである。今さらといった感じがしないでもないが、昨今、企業や国、そして私の属する地方自治体でもこの言葉が流行である。そこで、選択と集中を実施する上での組織の意識形成について、自分の体験から少し考えてみたい。

私の自治体も他都市に遅れを取ることなく(?)、財政非常事態に陥っており、市政の中長期の運営方針を確立すべく、この4月に新組織を立ち上げている。ここでは、都市経営戦略、ビジョンを作成し、縦割り組織の弊害をなくすべく、分権型予算編成を進め、政策・施策の選択と集中を明確に打ち出すことを考えており、私もその組織に組み込まれてしまった。

その組織の中でも、ビジョンを実現するための最大の問題点は、如何にトップ以下が一丸となり問題意識を持ち続けるかであり、社員(うちの場合は職員)のモチベーションの向上が非常に重要であると議論している。そして社員のモチベーションの向上・持続、経営意識を高めるためのポイントとして、私は自分が学生時代、特に4回生とM1、M2の3年間の研究室時代に培われたような人格、感性が参考になると認識しているのである。

「田中、ちょっと来い!」と、言われたらそれから3時間。私を受け持って頂いた先生にずっと怒られていた。それが週に2、3回。当時、東京～大阪間が3時間であった頃である。実験中の試験機の調子がおかしいとわかっていても、報告せずにそのままの状態。報告しても適当に。試験機の不調を先生に指摘されても、反応もせず、対応もしない。そしてアルバイトや遊びに抜け出す。ひどい学生だったと反省しきりであるが、それが今でも反面教師になっている。ここまでひどい社会人でなくても、程度の差があれど、似たようなことが日常的に起こっている。期限を切って仕事を依頼しても、期限になるまで中間報告はなし。期日に確認すると、問題があってストップしていたりする。自分で理解もせず、適当な報告をしてくる。相談もしない。仕事に追われていても責任感なく休暇を取る。等々。学生時代の私が、社会にもまだまだ顕在している。

社会が成熟するに連れ、いわゆる“はこもの”の必要性がなくなり、私たち技術屋の仕事がなくなる、と言われるが、こんな時代だからこそ、積極性、創造性、社会性、独創性、主体性など、私が学生時代に反面として学び、社会で育まれたような感性が必要であると確信している。技術屋の後輩達と酒を飲んで、ただの「行政マン」より「感性、技術力のある行政マン」の方が優れている、21世紀型のソフトなプロジェクトXの主演は我々だ、と説教している日々である。(説教する年齢になってしまった。)

M2を修了する際の発表会の数日前、先生は私の論文に良く似た事例を探しておくように、との指示があった。そして発表会当日、先生自ら「この論文に類似した国内事例はないの」と質問して頂いた。用意周到に答えるはずが、当時の私は中途半端な回答しかできなかった。今も反省している。

先生、私も中年になりました。一度、久しぶりに飲みに行きましょう!

選択と集中の時代、ピンチの後にチャンスあり

(12A) 前 前 代 国

高 田 昌 行 (C84)

選択と集中という言葉がいつの間にか定着した。国力も脆弱でインフラが圧倒的に不足していた時代から、GDP世界第二位となりインフラにも一定の充足感が見られてきた時代を迎えた今、当然のことかもしれない。

戦後の港湾政策を顧みても、貿易物資の99.7%が港湾を経由する我が国において、生産基盤として全国的に港湾機能を強化してきた時代から、グローバル化に伴う国際競争の激化の中で、国際物流基盤としての港湾機能の強化をこれまで以上に図る時代が到来したといえよう。

世界では、人、モノ、情報がボーダーレスに展開し、企業が立地する国を自由に選ぶ時代となっている。港も例外ではなく主要港が大手船会社により、あたかも「商品」のように選択される時代が到来した。国際港湾の取扱量の減少は結果的に港湾物流コストの増大を招き、貿易立国である我が国の国力を育む土台が揺らぐことにもつながる。既にコンテナ貨物取扱量ではわが国の1港たりともアジアの主要港に勝っていない。かつてコンテナ取扱量が世界第一位であった神戸港はいまや30位圏外となり、香港港、シンガポール港、上海港、深セン港、釜山港が世界の上位5港を独占している。

この中で我が国が21世紀に勝ち残るためにも、国の国際競争力を常に意識し、グローバル・国家的な観点から考えた政策の展開が必要となっている。

このため国土交通省ではスーパー中核港湾政策を展開し、全国の港から国際競争力を高めようとする国際港を選択し、集中的にソフト・ハード一体となった施策を展開することとした。本年7月23日には、国土交通大臣から京浜港(横浜港・東京港)、伊勢湾(名古屋港・四日市港)、阪神港(神戸港・大阪港)の3地域がスーパー中核港湾に指定され、他港との差別化を図ることとなった。

いわば「場」としては三大湾に、港湾「機能」としては国際物流機能の強化を集中的に図る政策を展開することとなった。私見ではあるが我が国全体の国際競争力の強化を図るためには、懐の深い国土構造を形成することが重要なのではないかと。東京一極集中ではなく、少なくとも三大都市圏において諸外国と遜色の無い投資環境を確保し、国全体の魅力度を高めていくべきではないか。

関西経済の底力をいまこそ発揮すべき時期だと思う。港湾を通じた国際物流機能の強化を契機として、民力が解き放たれ、魅力ある投資環境の形成や産業立地競争力の強化に少しでも寄与できないかと密かに期待している。

「場」としても「機能」としても港湾政策に選択と集中が始まる。ここまで書いてふと気づいたことがある。私も既に40代、人生80年のマラソンレースとすれば既に折り返し点を過ぎている。瞬間に過ぎ行く時間の中で、限られた自らの気力・知力・体力の選択と集中を何に向けて行うのか。政策を語る前に整理すべき重要課題はこれなのかもしれない。

函 館 一 の 香 香 升 康

(133) 夫 前 親 慕

製図では赤崎、大倉、中道、王君、構造では黒羽、広田、稲葉君が、土木では柳沢、森野君がいつも上位であった。医学部を卒業して更に土木コースを選んだ中条さんと、一緒に赤尾先生のフライッシュの研究をお手伝いしたのも懐かしい。何とか卒業したが、朝鮮動乱も一段落して其の頃は就職難になり、各人苦勞をしたが柳原、松山、杉原、出村谷、岡田、後に大塚君が官に行き、森野、杉木君が電発と関電に、池田、大倉君は公団、黒羽、三宮、植崎君が教壇、その他は民間企業や自営業へと何とか収まった。

今当時の写真をみると、みんな若さで輝いていた。就職してから早や五十年、その間の技術革新は目覚しく、学生時代のタイガー計算機が電子計算機になり、光学、レーザの測量への応用、コンクリート、鋼材の飛躍的な強度増加、シールド工法や免震工法など、技術の大いなる進歩は青函海底トンネル、瀬戸の長大橋、大規模ダム、複雑なカーブの高速道路の建設、五百メートルをこえる超高層建築を可能にし、その過程を見てきた技術屋としては振り返れば改めて驚く次第である。

卒業しても同級生の結束は固く、永年幹事の杉原君の努力で会合を続け、又、有志による海外旅行も盛んで杉木君の発案で三峡ダムを訪ね、杉原君の斡旋で上海の黄さんを訪問し、又、最近は鷺尾先生にゆかりある南満工専を訪ねて大連、旅順に足を延した。只残念なのは学友の九人が鬼籍に入り、又、昨年十一月、伊藤先生をお見送りして、教えて頂いた総ての先生方ともう会えなくなってしまったが、また逢う日まで残る我々健康に留意して仲良く過ごしたいものである。それにしても五十年は南柯の夢であったか？

現代若者の一側面

葛野 恒夫 (C64)

私は現在小さな鉄道会社に勤務しておりますので、乗客の行動をついつい気にしてしまう習性が身についてしまいました。

そんな中で、最近の若者の行動について気になることを少し述べてみたいと思います。

まず、ターミナルから電車に乗りますと座席が順次埋まっていくわけですが、乗客、特に若者は大抵隣の人と2～30cm間を開けて着席します。これは自分のテリトリーを無意識のうちに守る行為の名残であるのかも知れません。そのうちに自分の前につき革を持った人が立ってきても、そんなことには全く無関心で、詰めてくださいと言われてはじめて気がついたように行動します。

次に、最近ではなかば常態化しつつありますが、電車内でお化粧をする女性についてです。彼女たちは車内が混みあってもいっこうに気にする振りもなく、自分の顔の改造に余念がありません。周囲の人たちが不快に感じようと全く意に掛けないように見えますし、座席に座ったその空間は自分自身の専有物であるかのように振る舞います。

極めつきは、次のようなことです。

大阪南港では、夏になると野外ステージが設けられ、夕刻の涼風を受けてロックコンサートなどが演奏されて、多い時には数万人の若者が集まります。問題はステージがはねた後です。阪神・巨人戦が終わった甲子園駅ほどではありませんが、それでもコスモスクエア駅では何回かの改札制限をするほど混雑します。

そんな状況でも近頃の若者はところかまわず地面に座り込んでしまう行動をとります。特に階段を下りきったホーム上で車座になって座り込まれると、次々に下りてくる人たちの邪魔になるばかりか危険になってきます。しかし彼らはいっこうに平気と言おうか無関心をよそおい仲間同士の話に熱中しています。

場内整理の私たちはその都度、コラッと言いたいところを我慢して丁寧な言葉で注意しますと驚いたことにおとなしく指示した場所へ移動してくれます。

さて、これらの事例での共通項は何でしょうか。

まず、彼らは自分らの行為が他の人の迷惑になっているという感覚を持ち合わせていない即ち自分らの関心の外にあるものに対して無自覚であり、指摘されてはじめて気がつくということだと思います。

さらに、「公共の場」という意識が著しく欠如しており、裏返せば、他人に邪魔されたり、干渉されたりしたくない「私の場」こそがもっとも大きな関心事であるということではないでしょうか。

彼らは幼い頃から青年期までの間、相手の立場から自分を見るということに対して何の訓練もされてきていないのだろうかと思えます。

学校教育や社会人教育の中で「立場をかえて論争する訓練カリキュラム」の重要性はもっと認識すべきであると思います。確かに、道徳、マナーといった教育をギラギラ取り上げると修身教育の復活だと思われる面がありますので、もっとシンプルに考え、立場をかえる技術的訓練を様々な角度から行うべきではないでしょうか。まず型を覚え、魂はあとで挿入すればよいのです。

第一線の駅務員の言葉です「世の中、ほんの少しの思いやりで滑らかになりますのに」

卒業30年会を開催して

(44) 美田 森

青木 利博 (C74)

我々、昭和49年に卒業してから早や30年が経ち、これを記念して去る5月29日にホテルグランヴィア大阪で30年会を開催しました。同期生のうち28名が参加し、大学からは榎木先生、村岡先生、松井(繁)先生、中辻先生、新田先生のご臨席をいただき盛大に開催いたしました。

我々が入学した昭和45年は大学紛争の翌年ということもあり、豊中キャンパスがいくつか閉鎖されていたため、入学時から吹田キャンパスでの授業となりました。吹田キャンパスはまだ新しくあちこちで工事が残っていた記憶があります。またその年に開催された大阪万博もあり、通学時には万博客と重なり大変な思いをしながら通学したものでした。在学中は製図を徹夜でやりながら、真夜中に周辺へ車で食べにいたり、測量実習では万博の駐車場にあった小さな山を測量したりしました。また4年時には新潟港や青函トンネルを見学に行ったことなど懐かしい思い出であります。

当時の教授も伊藤先生、室田先生、毛利先生とお亡くなりになり寂しくなりましたが、当時の助手の先生方が現在は教授になられ、また同期の常田君が阪大の教授に就任したことは嬉しい限りです。

現在は土木工学科という名前も変わり、世の中も大きく変化し、建設業界や官公庁にも厳しい時代となっております。土木屋には氷河期ともいえる時代です。しかし、我々土木屋がこの国のハードを創ってきたとの思いが強くあり、これからも方法は変わらざるを得ないと思いますが、まだまだその必要性が残っているものと強く感じている次第です。私が勤務する神戸市でも阪神淡路大震災から来年で10年目を迎えますが、安心安全という基盤整備がなければ、街も暮らしも人の生命さえも危ういものになってしまいます。地震、台風、豪雨、地すべりなど災害が予想されるなか、技術者が声を出し、力を発揮していくべき余地は大いにあるはずで。

我々、皆50歳を越え髪の毛や体型も昔の面影が無くなった者も多くなりましたが、まだまだ元気さでは若い者には負けないと自負していることと思います。

卒業してから早や30年を経過し、その間紆余曲折はあるとは思いますが、誰一人として欠けることなく皆元気で活躍されていることは嬉しいことでもあります。

次回は5年後に、また皆元気で集まりましょう。



企業寿命30年説

(80) 一 葉 口 山

巽 昭 夫 (A74)

先日、構築会から卒業記念30年のネクタイピンを頂戴しました。気がつかないうちに、卒業して30年の節目を迎えたことを実感しました。まるで当時のことが昨日のような気分なので、懐かしく思い出されます。

同級生や先輩後輩とのご縁も今でもつづいています。僕は大学に9年間も在籍した関係上、幅広く先輩や後輩との関係を持つことが出来ました。そしてそのことが、人生を幅広く豊かなものしてくれています。そういう意味では、母校に感謝、同窓生に感謝の気持ちをわすれたらばちが当たりそうです。

同じ年代なので、悩みや体力の衰えなど、共通の話題には事を欠きません。まず第一に両親の面倒を見る事が近づいていることです。特に東京で活躍している同級生で、長男の場合、そろそろ田舎に帰って来いとのお要請が有る場合が多いことです。立場も部長クラス。子供たちも独立をはじめかけ。こんな場合、悩みが倍増しかけます。東京を取るか田舎をとるか。はたまたその場合の経済的背景は。

もう少し子供が小さい学友は、子供の進学に頭を痛めます。理科系か文科系か。浪人生を持つ場合、さっさと卒業して就職をして父さんの肩の荷を降ろさせ早く楽にさせてくれよ、なんて悩みを持つ友人もいます。もう少し華やかな悩みでは、25歳年下の女性と結婚して1歳と4歳の子をもうけ、子供が成人したときは80歳なんてつわものもいます(H先輩がんばってね)。50歳ではじめてお見合い結婚したのはよいけれど、若いそのじゃじゃ馬に蹴飛ばされそうな悩みを持つ後輩もいます。この年齢になると、人生いろいろ、悩みもいろいろ。

でもそれらの悩みを聞いてくれ、相談をし、励ましてくれるのもありがたい学友たちです。自分の近況を簡単に述べますと、中小企業の社長をしていましたが、自己リストラをする破目で現在無職。有り余っているのが時間。読書や鑑賞には事欠きませんが、受験生を抱え52歳で引退というのも少し早すぎる。かといって働き先は簡単に見つからないだろう(まだ就職活動はしていませんが)。こんな僕でよかったら、働き先を斡旋してください。なんて、とんだ投稿になってしまいまして恐縮です。

タイトルに掲げたテーマに関して簡単に触れたいと思います。卒業した当時は、オイルショックで就職が難しい時期でした。しかし、今の学生の就職難に比べると、天と地の差が有りそうです。私は縁が有って、私学の非常勤講師で教えに行っている関係で、その就職状況をつぶさに把握できる立場にありますが、建築関係の学科を履修しても、建築関係に就職できる人は半分もいません。その前に、就職浪人ともいえる、就職すら出来ない学生が半分近くもいるということに今の就職の難しさとともに、建築関係に職を求める難しさを実感します。

企業の寿命は30年しかないという仮説がささやかれ出したのは今から10年前くらいのことでしょうか。どういう根拠でそのようなことが言われたのかを考えてみると、まずその業種への需要が無くなった場合です。その次に、技術革新についてゆけなくなった場合です。最後に、欲しくてもその金額が用立てできなくなる経済力の低下、もしくは将来に対する不安などが挙げられます。この30年を振り返りますと、少子高齢化が激しいスピードで展開しています。2007年からはいよいよ人口が減少に転じ始めます。技術革新についても建築施工に関して、さまざまな努力がなされているのは衆知のとおりですが、家電製品と比べれば、その劇的度は、うんと低いように思われます。例えば、テレビひとつを取り上げましても、消費電力やその薄さ、鮮明度など、まだまだ建築には、改善の余地が有りそうです。将来の不安に対してはどうでしょうか。

マイホームひとつを取りあげても、ボーナスなどは当てにならず、大きな借金に躊躇を感じる人が多いと考えます。それに加えて、日本国が、貧乏になっている関係で、公共事業は縮小気味です。そんなこんな事情を考慮すると、どうも建築という業種も、企業寿命30年説の業種に加えられそうな気配です。しかし悲観的になっていても、事態は打開できません。光明を見出すために努力が必要です。そのヒントのひとつが地球環境問題にありそうです。廃棄物の再利用。緑化推進によるヒートアイランドの回避。古くなった建築物を廃棄するのではなくて再利用するコンバージョン。これらを研究するために、3年前にNPOエコデザインネットワークを立ち上げて活動をしています。主に阪大生のOBで構成されています。関心ある貴方。一度覗いてみませんか。お問い合わせはA74, 巽まで。

10年目の初心

神田 忠士 (C94)

学部を出てはや10年が経ち、先日、事務局から原稿作成の依頼が来ました。折角の機会ですので、拙文ながら10年目の節目にあたり雑感を書かせていただきます。

振り返れば、いつの時代も「変化」という点では同じでしょうが、この10年間は特に公共事業についての価値観が大きく変わった10年間ではなかったのか、と思います。例えば、大学4年の頃、就職活動中には「ゼネコン汚職」が、大学院に入って1年目には「阪神淡路大震災」がありました。就職後には「トンネルのコンクリート剥落」の事故が起こったり、「河口堰・ダム」や「補助金」、「道路公団」が大きくクローズアップされました。いずれも「公共事業」とっては大きな節目の出来事であったと思います。

私自身、転勤の多い職場に就職し、これまで「公共」事業に関する施策の立案から設計・施工・管理まで携わり、それぞれの課題を垣間見ることが出来たと思っています。特に、「更新の時代」と言われているとおり、構造物の維持補修が喫緊の課題となっている道路管理の現場では、構造物の「高齢化」にどうやって対処するのか、供用しながらの構造物の補修は、一般車両との接触による事故の危険性が高く、また、規制により通常の道路の容量を一時的に下げることにもなり、容量低下による渋滞や、工事での騒音に対する利用者、沿道の住民の理解を得ようと工夫を重ねてきました。

現在では、道路を「使う」立場として、交通安全の観点から、交通事故について調査を重ねる毎日が続いています。本来の業務は「交通事故の削減を目指した調査」ですが、いわゆる「道路管理者」の立場を離れ、違う立場で道路交通を見てみると、道路を「使う」立場での管理と、本来の「構造物」の管理との複雑な関係が見えてきて、今後の「構造物」の管理について、交通事故の削減策を考えると同じくらい、頭を悩ませています。

学生の頃と比べて、仕事に関して一番違うと思ったことは、「つくる途中」と「つくった後」があるということです。細かく言うと、理想(完成)はいきなり実現できるわけではなく、必ず途中(未完成)の過程があるということ、それぞれの過程での大きささまざまな課題・障害がある、ということ、さらにまた、理想が叶って「めでたし、めでたし、ハッピーエンド」で終わらないこと、でしょうか。これまで、諸先輩方が築き上げてこられた、たくさんのもの(構造物であったり、制度であったり……)も、途中でのさまざまな障害を乗り越えた結果であり、後に続く我々としては、それらを最良の状態にしておくと共に、状況の変化によっては新たな対応が必要になる、ということを感じています。

これまでの10年間の公共事業をめぐる環境の変化を考えると、今後、公共事業がどのような変化をたどるのか、多少不安もありますが、新しい公共事業を作っていくチャンスだと思います。景気が長い期間低迷していたものの、ようやく明るいニュースが聞こえ始めた今日、諸先輩方と一緒に公共事業の新しい形を目指す手助けが出来れば、と思っています。

先日の異動で幸いにも大阪に戻り、また違った立場・意味で母校に関わるができます。「10年前の初心」ではなく、これまでの経験を踏まえた「10年目の初心」で、これからも頑張りたいと思います。

大阪支部だより

大阪支部は平成15年度の活動として、11月21日の午後から見学会と総会、懇親会を行いました。見学会では最初に、中之島の中央公会堂の免震装置を見学しました。大正末期に建築された中央公会堂の保存・再生工事が平成15年秋に完了し、耐震対策として新たに設けた地下2階部分に免震装置が設置されました。普段、滅多に見ることができない建物の下に入り、既存の建物の下に新たな装置を設置する技術に、一同、感心いたしました。

続いて、10月に大阪ミナミにオープンしたなんばパークスを見学しました。

かつての「南海ホークス」のホームグラウンドであった大阪球場跡地を含む再開発地区につくられた複合都市で、国際都市を目指す大阪の新たな拠点となるものです。グラウンドレベルから8階まで続く段丘状の屋上公園は、圧倒的な緑の量で貴重な都会のオアシスとして訪れる人の心を和ませています。



見学会は榎木先生をはじめ、約40名の方に参加いただきました。

総会、懇親会はホテル南海において、約60名の会員の出席をいただきました。懇親会では会長の出席もいただき、教室の近況報告を交え、榎木先生の万歳三唱と終始和やかな雰囲気の中で盛会のうちに幕が閉じました。

まだ、この会に出席したことのない方、特に若手の方など、是非今年は参加していただければ幸いです。

なお、平成16年度の大阪支部役員を紹介させていただきます。

支部長	春元 靖弘 (C69)		
副支部長	田中 久俊 (C72)	福来 知自 (A72)	
監事	中平 明憲 (C77)	和田 雅洋 (A77)	
幹事長	芦原 栄治 (C76)		
幹事	鈴木 宏彰 (C82)	吉田 一夫 (C84)	奈良 靖 (C78)
	指田孝一郎 (A80)	松村 暢彦 (C91)	横田 隆司 (A83)
	小池 重一 (C88)	下村健太郎 (A98)	指吸 政男 (C86)

愛知支部だより

愛知支部は、東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県に在住もしくは勤務している会員で構成しています。

東海三県での近況をお知らせします。

- ・中部新国際空港が、2005年2月17日に開港予定。

中部圏の新しい空のゲートウェイ(玄関)となる中部国際空港は、国の「第七次空港整備七箇年計画」において、大都市圏拠点空港として事業の推進を図ることが位置付けられました。平成10年5月には、事業の主体となる「中部国際空港株式会社」が発足し、平成12年8月には、伊勢湾常滑沖海上において、空港建設工事が始まりました。その後、工事は順調に進んでいます。

愛知県は、中部国際空港株式会社をはじめ関係者と密接に連携・協力を図りながら、平成17年2月17日の開港に向け、全力で取り組んでいます。

- ・愛知万国博覧会が、2005年3月25日から2005年9月25日の185日間、開催予定。

21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決の方向性と人類の生き方を発信するため、史上最多の国・国際機関の参加の下、自然の叡智をテーマとした新しい文化・文明の創造を目指して愛知万国博覧会が開催されます。私どもは、技術的な支援からボランティア活動まで、積極的に支援していきたいと考えています。

- ・純利益1兆円をこえるトヨタ自動車に牽引され、産業界の景気は好調。

有効求人倍率は全国平均を上回り、就労環境は良好です。特に自動車関連業界はバブル期を上回る過去最高売上げを計上する企業が続出し、好況感があります。

今年度の愛知支部役員は以下のとおりです。

支部長	英比 勝正 (C72)
副支部長	矢野 修一 (C74)
顧問	今倉 邦彦 (A57)
	森下 弘士 (C58)
監事	格清 哲夫 (A72)
幹事長	降簇 達生 (C83)

東海地方にご異動の際には是非お仲間に加わっていただきたいと思ひます。

【幹事長 降簇 達生 (C83) 記】

兵庫支部だより

平成15年度の支部活動のうち、主なものとして11月7日金曜日の午後に岸田前支部長を中心に皆様のご協力により、開催した見学会・総会及び懇親会についてご紹介しましょう。

見学会では、まず最初に、兵庫県三木市の震災記念公園において7月に主要建物が完成した文部科学省「実大三次元震動破壊実験施設」の工事現場を訪れました。

世界最大となる縦、横、垂直の実大3次元震動破壊実験施設で、今後の試運転等を経て、阪神・淡路大震災から10年となる2005年1月に全施設が完成するそうです。参加者全員が、職員の方から震動台での興味深い実験計画等の説明を伺いました。

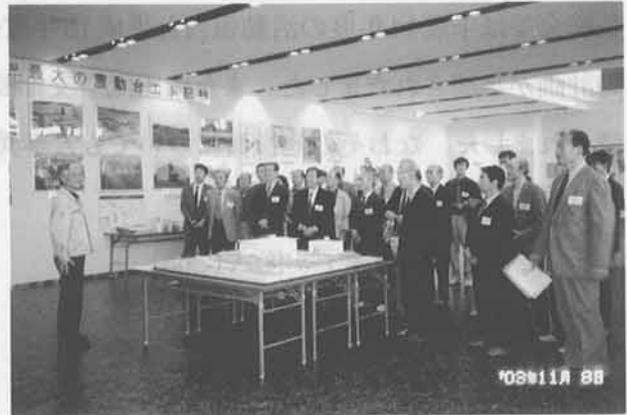
次に、ダム建設により分断された生態系を回復し、より豊かな水環境の創造を図ることを目的に全国に先駆けて取り組まれた例として、兵庫県「青野ダム・多自然型魚道」を訪れました。現地では、「ダム水環境改善事業」として生態系に配慮された「多自然型魚道」が整備されており、参加者は、遊歩道や水中観察施設から覗きこみ魚たちや水草などが自生している環境を創出している工夫などを学習するひとときを得ました。

総会は、神戸市諏訪山公園の麓の閑静な住宅街にある鄙びた神戸市職員共済施設「諏訪山荘」で行いました。

出席者は42名で14年度の報告・決算事業計画の審議や役員改選などを行いました。午後1時からの行動で総会が終わる頃には皆さんのどが渴いていたのか、待ちきれない雰囲気の中、純和風の大広間におきまして懇親会を始めました。

建築工学専攻長柏原士郎先生、土木工学専攻長代理の出口一郎先生、前田孝男構築会会長も駆けつけて頂き、にぎやかな懇親会となりました。

15年度報告は以上ですが、16年度の主な活動としては、9月3日に見学会及び懇親会を予定しており、平成17年度の完成を目指して工事が順調に進んでいる「神戸空港島」及び阪神高速道路神戸山手線と神戸高速鉄道との地下交差部に該当する大道工区の工事現場を見学先候補に考えております。さらに、総会についても、今後、幹事会を中心に調整を図ってご案内いたします。支部では、このような多彩な催し等を通じ新人の加入を心よりお待ちしておりますので、ご参加の程よろしく願います。



支部長	西田 泰晤 (A68)				
副支部長	佐俣 千載 (C71)				
監事	渡辺 哲男 (C71)	園田 学 (A78)			
顧問	松浦 勢一 (C53)	王 柏群 (A54)	木村 公之 (A59)	入江 恂一 (A62)	
	神田 徹 (C63)	明渡 烝輔 (C65)	岸田 威 (C66)		
相談役	長尾 直治 (A69)	川谷 充郎 (C72)	道奥 康治 (C77)		
幹事長	田谷 孝壽 (A83)				
幹事	亀本 博文 (C65)	山口 征宏 (C69)	志波 秀明 (C71)	橋本 彰 (A72)	
	村原 健三 (E72)	中山 久憲 (C73)	熊木 隆 (E74)	本井 敏雄 (C75)	
	田中 均一 (A76)	榊原 敏夫 (C77)	大原 良夫 (C79)	桜井 秀憲 (C80)	
	富岡 洋 (A80)	吉村 文章 (C82)	細野 一夫 (E84)	荒谷 一平 (E87)	
	秋川 宏之 (A88)	大久保 浄 (E91)	石原 匡 (A91)		

【幹事長 田谷 孝壽 (A83) 記】

吉野会員名簿2003

(日02月1年03年一第1頁2年2130年)

(2) 名簿における学生会員

上記と同様、所属会員の個人情報の保護に配慮し、特に在学生のうち、学生会員(学部学生および本学を卒業していない大学院生)に関しては、今年度発行の名簿より、名前のみの記載とする。

(3) 名簿データの提供について

本件については、昨年度より以下の方針に基づいて実施している。

①印刷データ(現状のタックシール印刷)については、会員からの要望に対し、幹事長の許可を得た上で、原則として実費で応じる。なお、支部活動の為に支部からの要望は可能で、要求した分の支払は、本部預かりとする。

②特定の条件で抽出した会員情報の一覧表(ハードコピー)で、卒業年度、氏名、勤務先(大項目)以外の情報を含むものは、支部が支部活動の為に要求した場合と、幹事長が許可したものを以外は提供しない。

③デジタルファイルでの提供は、支部が支部活動の為に要求した場合、あるいは、幹事長が必要と判断し、許可した場合に限り、卒業年度、氏名、勤務先(大項目)の情報に限定する。

【2004年度幹事長 飯田克弘(C教)記】

2003年度	2002年度	2001年度	2000年度	1999年度	1998年度	1997年度	1996年度
2,991,820	2,712,173	2,519,682	2,312,608	2,100,110	1,891,873	1,732,288	1,582,480

2003年度	2002年度	2001年度	2000年度	1999年度	1998年度	1997年度	1996年度
2,991,820	2,712,173	2,519,682	2,312,608	2,100,110	1,891,873	1,732,288	1,582,480

2004年度 構築会事業計画

事業項目	実施時期
1. 構築会名簿・構築会だよりの発行・配布	2004年10月頃
2. 記念品の贈呈 (男性：タイピン、女性：ネックレス) 卒業生、新規修了者 卒業30周年の会員	2005年3月 随時
4. 支部活動への補助 支部活動への補助金交付	随時
5. 土木・建築工学専攻への事業補助	随時
6. 役員会の開催	2004年5月14日
7. 「構築会を考える会」の開催	随時

2004年度 構築会予算

■ 収入の部

	2004年度予算	備 考	2003年度実績	2002年度実績	2001年度実績	2000年度実績	1999年度実績
会 費	5,000,000	前年度会費納入実績に応じて	4,840,636	5,077,520	6,354,270	6,149,300	5,949,500
広 告 料	700,000	2002年度(名簿発行年度)並み	438,845	718,740	559,160	1,160,000	1,660,000
利 息	2,000		57	5,152	1,437,089	1,960	1,974
寄 付 金 他	0		0	0	0	0	0
そ の 他	0		54,000	0	0	0	0
単年度小計	5,702,000		5,333,538	5,801,412	8,350,519	7,581,260	7,611,474
前年度繰越	6,175,173		6,539,695	8,512,609	6,730,119	6,991,873	7,586,460
収 入 計	11,877,173		11,873,233	14,314,021	15,080,638	14,573,133	15,197,934

■ 支出の部

	2004年度予算	備 考	2003年度実績	2002年度実績	2001年度実績	2000年度実績	1999年度実績
名簿印刷費	4,100,000	名簿発行年並み	2,106,696	4,126,710	2,384,130	4,255,587	4,690,713
郵便通信費	150,000	平年並み	77,764	170,447	143,263	239,074	131,052
謝 金	320,000	平年並み	312,000	285,000	390,000	327,000	322,000
記 念 品 代	130,000	前年度並み	124,330	243,660	246,780	275,100	197,925
支部援助金	1,800,000	前年度並み	1,697,450	1,823,450	1,658,300	1,577,300	1,584,500
教室寄付金	800,000	前年度並み	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行 事 費	0		0	0	579,503	0	0
会 合 費	250,000	平年並み	405,500	239,335	83,795	193,312	159,590
出 張 費	60,000	平年並み	59,760	0	59,760	59,760	58,860
慶 弔 費	50,000	平年並み	105,833	63,300	95,602	580	130,530
備 用 品	0		0	0	0	0	0
消 耗 品 費	20,000	平年並み	462	13,604	13,651	5,650	13,141
振替手数料	10,000	平年並み	8,265	8,820	11,130	109,651	114,750
会費滞納分催費	150,000		0	0	102,115	0	0
そ の 他	0		0	0	0	0	3,000
小 計	7,840,000		5,698,060	7,774,326	6,568,029	7,843,014	8,206,061
予 備 費	4,037,173		6,175,173	6,539,695	8,512,609	6,730,119	6,991,873
支 出 計	11,877,173		11,873,233	14,314,021	15,080,638	14,573,133	15,197,934

会員の皆様には、平素から会の運営と発展にひとかたならぬご支援を賜り、事務局一同心よりお礼申し上げます。さて、構築会の事務活動などに関して以下に報告いたします。

1. 財政について

会費の高額滞納者に対し「会員名簿」と「構築会だより」の発送を停止することが2000年度の役員会で議決されておりますが、それを受けて今年度から会費請求書に滞納額を明示するとともに、「次回会費請求時に、12,000円を越える滞納額があった場合、会員名簿および構築会だよりの発送を停止させて頂く」旨の文面を記載いたしました。会則の「会員の親睦を計ることを目的とする」という本会の活動目的にご理解を賜り、財政面でもご協力いただければ幸いに存じます。

2. ホームページの開設

2002年度より、事務局で作成しました構築会のホームページの電子情報を土木工学専攻・建築工学専攻の各管轄のWebサーバー上に転載することが、両専攻のご好意により正式に承認されました。これに伴い、以下のURLより構築会のホームページの内容が閲覧できるようになります。今後は会員の皆様のご要望に添えるようなメニューの追加の可能性も検討してまいりたいと考えております。是非、構築会のホームページを御覧いただき多くのご意見を賜りたくお願い申し上げます。

<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>
または
<http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

3. 事務局役員の交代

今年度の役員会をもって、向井洋一 幹事(A91)が任期を満了のためご退任され、新たに飯田 匡(A92)氏が幹事に就任されました。今年度の体制は、飯田克弘 幹事長(C教)、荒木進歩 幹事(C95)、飯田 匡 幹事(A92)となります。よろしくお願いたします。

【2004年度幹事長 飯田 克弘(C教)記】